



夏の感覚

風が吹き、風鈴が鳴った。

空気は適度に湿気を含み、体にまとわりついた。

だが6月の梅雨の日々のような不快なジトジトとした空気ではない。

もうすぐ乾いた熱風が彼らを奪い去る予感があった。

夏が来るのだ。

草木は青々と生い茂り、動物が野山を駆け回る。

生命が躍動するのだ。

だが人間はもう夏を純粹に感じる事は出来ない。

多くの人間にとって、夏というものが日々の雑事で埋め尽くされてしまっているからだ。

それはそれで悪くない。

だが夏を感じるのとは違う。

夏を感じるとは、少年が炎天下の深い川に飛び込むあの一瞬に他ならない。

少年は体で川の匂いを感じ取り、呼吸の乱れで自身の生を確認する。

もし気を抜けば、その身は深い川の底に沈んでしまうだろう。

だからこそ少年は自分の手足を限界まで使い、浮遊する。

少年はそこで自分がかつて大自然の一部であった事を感じるのである。

そう、かつて社会などというものはこの地球に存在しなかった。

それらは人間が自分達の生活を便利にするための一つ的手段に過ぎない。

だから生命の根幹はそこにあった。

少年が川の浅い所まで泳ぎきり、顔を水面の上に出す。

水面は太陽の強光を乱反射し、左右に揺れている。

そして眼前には頭上数十メートルから流れ落ちる滝があった。

苔の生える岩の窪みを這うように流れるその滝の流れは、強過ぎず、弱過ぎず、ただ淡々と同じ作業を繰り返し、時を刻んでいた。